

特 集

グローバル化とアジア社会の変容

東南アジア地域研究の視点から

編集にあたって

西欧から出自し、非西欧世界で反転したオリエンタリズムの影響下で、アジア社会は長い間「植民主義」とか「新植民主義」あるいは「第三世界主義」といったパラダイムに翻弄されてきた。ポストコロニアル批判は、まさにそこを通底するものとして、社会科学という「鏡」を用いて、「近代化」という多次元的な概念を介して、「他者」および「自己」をみるといった、ある種のヘゲモニーの構造を読み解いたのである。そしてそうしたヘゲモニーの構造から派生した「普遍主義的な認識論のみせかけ」(スチュアート・ホール)と厚顔無恥な文化の越境にたいして痛烈なまなざしを向けた。だが一方で、いわゆる帝国主義の時代を経て脱植民地化にいたるプロセスを見据えながら、「植民する者」と「植民される者」との二項対立的な機制に決して回収されない、ひとつの国、ひとつの社会を越える重層的な権力関係—権力装置のあり様を浮き彫りにさせたのも事実である。

ところでそうしたポストコロニアル状況は、いまのところ、コロニアル文化を脱色化しているようにみえる。個性を喪失した、無機質のアジア・メガシティのランドスケープに最も象徴的にあらわれているが、それ自体、グローバル化がもたらした「超領域性(グローバルリティ)」の内実をはらんでいる。そしてそこには、ポール・ギルロイの言葉を借りると、「ディアスポラ的」なものが横並びの状態でリゾーム的に立ちあがりながら、「中心—周縁」の構造を変えていく、そしてローカリティの多層性と分節性を構成し形成していくメカニズムが埋め込まれている。コロニアル文化の痕跡を深くとどめながら、グローバルなものと同ローカルなものが動き続けているメガシティは、それゆえアジア社会のモダニティの地平を示してあまりあるのだ。

いわば直線的な歴史の思考と啓蒙の物語ナラティブに回帰しないポストコロニアルの知の枠組みがもとめられているとするなら、それは上述のようなアジア社会のモダニティの地平を踏まえて、重層的な権力関係—権力装置の真っ只中から立ちあらわれるグローバルなものと同ローカルなものとのパラドックスを、脱中心化され差延化された相アスペクトで人びとの生活次元から読み解いていく知の戦略であろう。またそうした知があればこそ、アジア・メガシテ

ィにおいて、そしてそれらと「時間—空間の圧縮」(ディビッド・ハーヴェイ)によって深くむすばれた「周辺の周辺」において、民族・宗教・言語が激しくぶつかりあうハイブリッド社会の内実が、凝集と散種を繰り返しながら織り成す転態とともにあぶりだされることになるのである。いずれにせよ、グローバル化によって揺れるアジア社会は、かつてのように「「こちら」と「あちら」,「昔」と「今」,「母国」と「海外」という視点」(スチュアート・ホール)にさらされるのでもなければ、過剰な資本のフローとそれを“神聖化”する言説にまるごと従属するのでもない。

本特集に寄せられた五つの論文は、以上のような問題視角をゆるやかにではあるが共有している。まず吉原論文であるが、コロニアルの地層がポストコロニアルのそれへと変容を遂げる転位のプロセスとそこから立ちあらわれる新たな社会編成の基本的特質が、プライメイト・シティがアジア・メガシティへと溶け込み、変換される転相に即してあきらかにされる。次に見市建論文では、インドネシアとくに都市部においていわゆるオルデ=バル(スハルト体制)以降、顕著にあらわれているイスラーム主義運動の有するモダニティの位相が、いわば普遍的でヨーロッパ中心的な概念である国民国家・議会制民主主義、工業化=都市化が随伴する合理主義、個人主義/人権をメルクマールにして探られる。第三の藤善正己論文では、いまひとつのアジア・メガシティであるクアラルンプルの「世界都市」の位相が、グローバル化とローカル化の交差する地平で、しかも長年の経験的領野であるバックヤード世界の変容を踏まえて、さまざまなコンテキストで読み解かれる。第四のラファエラ・D・ドウィアント論文では、グローバル化に揺れるアジア・メガシティにおいて、中流化と相俟って広範囲にみられるインフォーマルセクターの分節性と多層性の一側面が、ジャカルタのカンボンでのプダガン・クリリン(行商人)に関する精緻な事例分析にもとづいて浮き彫りにされる。そして最後の熊谷圭知論文では、グローバル化の連鎖の一方の端をなすパプアニューギニアの辺境の事例分析から、もうひとつの空間の「仕切り直し」とローカリティの変容の内実が透視される。併せて、パプアニューギニアをめぐる創造の地理学の再提示・脱構築がいかにして可能かが問われる。

さてこうしてみると、五つの論文は、グローバル化、ポストコロニアル、モダニティ、そしてローカリティをキーワードとして相互に共振しながら特集テーマ「グローバル化とアジア社会の変容」を織り成していることがわかる。しかもそれらは別々のエピソードを取り扱っているようにみえながら、それらを接合することによって、グローバル化のもたらす脱中心化や差異化の波に大きく呑み込まれながらも、いまなおコロニアルの痕跡を深くとどめているアジア社会のあり様を描出することができたのではないかと思う。

なお、五つの論文とともに特集を構成する冒頭の座談会では、2001年9月11日が反転してあらわれているアジア社会のモダニティのねじれの現局面が、これまでアジア社会が層として担保してきたさまざまなネットワークの内実とそれらがコロニアル文化の機制のもとで歪められてきた歴史をふまえて、縦横に論じられている。

(東北大学大学院文学研究科教授 吉原直樹)